

# 『皇極經世解起數訣』『聲音韻譜』について

大岩本幸次

「聲音韻譜」は南宋の祝泌が編纂した中國語音節總表、いわゆる韻圖の一種である。韻圖は様々な種類が世に出たと推測されるが、唐の元の時期についてみれば保存する例は多くない。こうした状況にあつて幸い「聲音韻譜」は祝泌『觀物篇解』付録の『皇極經世解起數訣』に繼承され、今に宋代韻圖の姿を伝える貴重な資料となつてゐる。また、該書に示される字音狀況は當時の言語音を反映するとの指摘もあり、中國語史研究資料としても注目される。

本稿では、「聲音韻譜」の韻圖としての特徴を整理し、その成立過程および音韻學史的觀點よりみた「聲音韻譜」の資料的位置を論ずる。また、各種テキストの調査より得られた「聲音韻譜」の音韻史に關わる特徴を提示する。

## 一 「聲音韻譜」諸本

筆者が目睹し得た「聲音韻譜」は八種、いずれも抄本である。

〔a〕文淵閣四庫全書本（『珍本二集』による。以下、〈四庫本〉と稱す）…有界八行二十一字、白口四周雙邊。

〔b〕靜嘉堂文庫所藏清抄本（以下、〈靜嘉本〉）…二八・五×一八・

【皇極經世解起數訣】「聲音韻譜」について

二纏。有界十二行二十一字、線黑口四周雙邊（二一・五×一五・六纏）。印記「藤華吟館・益齋鈔藏・歸安陸樹聲藏書之記・好書須惜得來難・靜嘉堂珍藏」等。封面「宋淳祐八年刊本／祝氏皇極經世觀物篇解／藤花吟館鈔藏」。

〔c〕臺北故宮博物院所藏明抄本（以下、〈故宮本〉）…二七・九×一八・二纏。有界十二行二十一字、粗黑口對向魚尾、四周雙邊（二一・五×一五・六纏）。故宮本『觀物篇解』全四冊中の第三冊。題箋「皇極經世解／第三冊／聲音韻譜（小字）」。

〔d〕南京圖書館所藏明抄本（以下、〈南京本〉）…有界十一行二十二字、白口無魚尾、四周雙邊。錢塘丁氏八千卷樓舊藏本。印記「人氏需・孟繼儒印・八千卷樓藏書印・江蘇第一圖書館善本書之印記」等。「清乙巳歲玄月人需昧雲子謹識」（孟繼儒か）と記せる跋文あり。

〔e〕臺灣師範大學所藏清抄本（以下、〈師大本〉）…二七・七×二一・三纏。無界十二行二十七字。首三行目「清福建臺灣府知府兼海防兵備道提督臺灣學政〔錢塘／續裕〕周懋琦校」。印記「德福壽安寧署周氏珍藏・鴻寶校書記・周氏懋琦・東北大學寄存圖書」等。

〔f〕人民大學所藏清抄本（以下、〈人大本〉）…中國人民大學古籍善

本書目』曰く清康熙間抄本。有界十行二十二字。白口左右雙邊。韻圖部分は等位を無視して筆寫され、特に後半は韻圖の體をなさない。〔g〕中國國家圖書館所藏明抄本（以下、〈國家明本〉）…No. 一二八五一。有界十一行二十一字、黒口四周雙邊。「聲音韻譜」は存四卷（二～五）のうち第五卷に収録。もと第六卷が存在したらしく第五卷は第四十一圖で途切れる。各葉末行は缺損して殆ど判讀不可。

〔h〕中國國家圖書館所藏清抄本（以下、〈國家清本〉）…No. 一二四七九。有界十二行二十一字、白口四周雙邊。卷首「安徽周懋琦校」。印記「德福壽安寧署周氏珍藏・鴻寶校書記・周氏懋琦」等。

他に山東の曲阜文物管理委員會に『康節先生觀物篇解五卷』明抄本を存するというが未見。諸本の状況から推すに、この曲阜本が現存するとして「聲音韻譜」が収録されている可能性は高い。

抄本ゆえの事情もあつたか、諸本の收字には誤字等により異同も多く、八種の相互關係についてなお十分な把握に至っていない。ただ、〈師大本〉と〈國家清本〉の二種は共に周懋琦（同治・光緒年間に臺灣知府）による校本で内容もほぼ合致するのに加え、〈靜嘉本〉もこれらに内容がよく類似して三本で一筆をなす。〈國家清本〉の天頭に「四庫本以下卷二」と書込があり、周氏が四庫全書本を見た事を示唆するが、周氏校本と〈四庫本〉との間に内容の顯著な類似は確認されず、〈四庫本〉にはむしろ他の明抄本との合致が部分的に認められる。陳梅香氏が〈師大本〉を観察して指摘する如く、周氏は二種以上の先行本を用いたとみられるので、或いは一本に〈靜嘉本〉即ち「藤花吟館鈔藏」本に連なるものを選んで底本とし、他に〈四庫本〉等を参照したものであろうか。また〈師大本〉と〈國家清本〉の先後關係について、例えば〈國家清本〉で修正のためであろう、文字を墨塗し

た「𠵼」（𠵼／阮韻）「𠵼」（縛／線韻）等の字を〈師大本〉では各々「𠵼」「𠵼」と空白で置く點から推測するに、恐らく〈國家清本〉は先行本に周氏が校訂を加えたいわば稿本であり、この稿本に基づいて〈師大本〉が編まれたと考える。〈師大本〉について陳梅香氏は「寫すのみで校訂が少なく、校訂も中途半端」と述べるが、こうした指摘も〈師大本〉が既に〈國家清本〉を経た清書版である事に起因する可能性がある。また陳梅香氏は平田昌司氏の見解を引いて、諸本のうち〈靜嘉本〉を最も高く評價したが、平田氏の見解はあくまで〈四庫本〉との比較において、また「起數訣」を含む「觀物篇解」全體について〈靜嘉本〉を總的に評價したものであった。判断自體は極めて妥當と思われるが、〈靜嘉本〉にも誤記脱漏や校訂部分の事實誤認は決して少なくはない。「廣韻」など先行資料の内容と合うという意味では、陳氏自身も「本来の校勘精度が高い」と述べる。〈故宮本〉が最も規範性が高く、その精度の高さには筆を抜く感すらある。とはいえ〈故宮本〉が完璧な譯でもないの、綿密な校正を経た結果というより、元々原本に誤りが少なかった状態を〈故宮本〉が良く保存したものとすべきかもしれない。

## 二 「聲音韻譜」の編纂過程

### 二一 書の構成

「聲音韻譜」を収める『皇極經世解起數訣』の構成は次の通り。

- (一) 祝泌自序（淳祐元／一二四一年）
- (二) 一百十二聲・一百五十二音（韻類表および聲類表）
- (三) 聲音說（等韻學概述）
- (四) 起聲音卦草（卜占手順と例）

(五) 切字姥開指 (聲類解説)

(六) 辨搞物及罄欵之音法 (音聲分析理論)

(七) 韻例 (韻圖の凡例)

(八) 二十四音上掌圖 (掌を象る圖に調音部位・例字を示すもの)

(九) 聲音韻譜 (聲調優先型の韻圖)

このうち (一) に挙げた二表は「聲音韻譜」の構造に關係するため少し内容に觸れておきたい。これらは、北宋・邵雍(一〇一一—一〇七七)『皇極經世書』所收「聲音唱和圖」の所謂「天聲圖」(韻類表)と「地音圖」(聲類表)を、卜占に用いる事を前提にそれぞれ再構成したものとされる。このうち、韻類表である「一百十二聲」では、「聲音韻譜」との照合に配慮して、「天聲圖」所收の各字が切韻系韻書で相當する韻目に換えられている。また、聲類表である「一百五十二音」では、「地音圖」所收字が調音部位「唇舌牙齒喉半(半舌/半齒)」の順に整理されている。下段に「一百五十二音」と「地音圖」を比較した表を挙げる。收字の等位のみアラビア數字で示す。

「一百五十二音」で開發收閉を各々清濁に分けて半音に一種を増やすのは、恐らく枠敷を「地音圖」と同じ一九二にするため、この點は後述する「聲音韻譜」の構造と關連を有する。また、「地音圖」に「開發收閉」の別で分類されている諸字が、韻圖の「一二三四」等によく對應する點、「一百五十二音」にも同様の傾向が看取され、後者が既存狀況の維持を目指した事が窺える。但し體系として完結をみていた「地音圖」の再編に際して無理も避け難かつたか、例えば「地音圖」の「壬・赤」二字は「一百五十二音」では配置枠を確保できず削除されている。また、「地音圖」で唇音を「卜步普旁」(重唇音)と「夫父武文」(輕唇音)とに分かつ所、「一百五十二音」では兩者を混

『皇極經世解起數訣』「聲音韻譜」について

		「地音圖」				「一百五十二音」				
		開發收閉		開發收閉		開發收閉		開發收閉		
		清	濁	清	濁	清	濁	清	濁	
音一	唇	1 2 3 4	1 2 3 -	1 2 3 4	1 2 3 -	1 -	3 1	3 2	- 3	3 4
	唇	- - 3 4	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 -	1 -	1 -	3 -	4 -
	唇	1 2 3 4	1 2 3 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1	2 2	2 2	3 3	4 4
	唇	- - 3 4	1 2 3 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 3	2 2	2 2	3 3	4 4
音二	舌	1 2 3 4	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 -	1 -	1 2	4 3	- -
	舌	1 2 3 4	4 1 4 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 -	1 -	1 2	4 3	- -
	舌	1 2 3 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1	1 1	1 1	4 4	- -
	舌	1 2 3 4	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1 4 -	1 1	2 1	2 1	3 4	- -
音三	牙	1 2 3 4	4 1 4 -	4 1 4 -	4 1 4 -	1 -	1 -	2 2	3 -	4 -
	牙	- 2 3 4	4 - 4 -	4 - 4 -	4 - 4 -	1 -	1 -	2 -	3 -	4 -
	牙	1 2 3 4	- - - -	- - - -	- - - -	- -	- -	- -	1 3	4 4
	牙	3 2 3 4	- - - -	- - - -	- - - -	1 1	2 2	2 2	3 3	4 -
音四	齒	3 3 - 3	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	1 -	1 -	1 2	4 3	- -
	齒	1 3 - 3	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	1 -	1 -	1 2	4 3	- -
	齒	3 3 - 3	- - 3 -	- - 3 -	- - 3 -	1 -	1 -	1 2	4 3	- -
	齒	3 3 - 3	- - 3 -	- - 3 -	- - 3 -	- 4	- 4	1 2	3 4	- -
音五	喉	1 2 3 4	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	4 -	4 -	2 2	4 3	- -
	喉	1 2 3 4	- 2 - -	- 2 - -	- 2 - -	1 1	1 1	2 3	3 -	4 3
	喉	1 1 3 4	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	3 1	3 1	3 2	- 3	3 4
	喉	1 2 3 4	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	1 4	1 4	2 1	3 4	4 -
音六	半	1 1 4 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	3 -	3 -	3 2	- 3	3 4
	半	1 1 4 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	1 1	1 1	2 2	3 3	- -
	半	1 1 4 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- -	- -	- -	3 3	- -
	半	1 1 4 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- 2 3 -	- -	- -	2 2	3 3	- -

淆して一部の唇音字を喉音類に置くなど、變更意圖が必ずしも明確でない部分も多い。こうした疑問點については李新魁氏の論考に舉例と解説があり、李氏は「一百五十二音」の文字配置に祝氏の母方言の影響を指摘している。

二・二二「韻譜」と「心鑑」

「聲音韻譜」が他の韻圖と異なる大きな特徴の一つに、それが八十枚の表から構成される點が挙げられる。この數は例えば「韻鏡」が四十三枚から成るのに比べ倍に近い。表が増えた主な理由は、從來は一

枚で済んでいた内容を「聲音韻譜」が二枚に分けて示すためである。

例えば、「聲音韻譜」では『韻鏡』第一轉の一・四等にあつた字を第一圖の一・四等とし、『韻鏡』の二・三等にあつた字は「聲音韻譜」

第二圖の二・三等として収める。こうしたいわば機械的な分置による

ため、逆に表を合併する事も容易で、筆者の整理するところ實質的に

四十五枚の韻圖として「聲音韻譜」を考える事ができる。左は孔仲溫

氏作成の表に基づき、「聲音韻譜」が加えた箇所を四角で囲み、削除

した箇所に二重線を引いたものである。

『韻鏡』を出発點に考えると、次の過程を経て現在の状況に至つた

とみる事ができる。

①内轉九・十廢を外轉十三・十四祭の位置に移動、祭韻は入聲欄の

夫・泰韻らと併せ第十七・十八圖として分出(二枚増)。

②外轉二十一・二十二元を第二十七・二十八圖として分出し(二枚

増)、外轉二十三・二十四の仙韻三等は第二十五・二十六のもと元

韻鏡	呼	平聲	上聲	去聲	入聲	聲音韻譜
内1	開	東-東-	董---	送-送-	屋-屋-	1(1-2)
内2	合	冬-鍾-	腫-腫-	宋-用-	沃-屋-	2(3-4)
内3	開	-江--	-講--	-絳--	-覺--	3(5-6)
内4	開	支-支-	紙-紙-	真-真-	真-真-	4(7-8)
内5	合	--支-	--紙-	--真-	--真-	5(9-10)
内6	開	脂-脂-	旨-旨-	至-至-	至-至-	6(11-12)
内7	合	--脂-	--旨-	--至-	--至-	7(13-14)
内8	開	之-之-	止-止-	志-志-	志-志-	8(15-16)
内9	開	--微-	--尾-	--未-	--未-	9(17)
内10	合	--微-	--尾-	--未-	--未-	10(18)
内11	開	--魚-	--語-	--御-	--御-	11(19-20)
内12	合	模-虞-	姥-麌-	暮-遇-	暮-遇-	12(21-22)
外13	開	哈皆-齊	海駭-齊	代怪 <small>祭</small> 霽	困去 <small>祭</small> 屑	15(25-26)
外14	合	灰皆-齊	賄駭--	隊怪 <small>祭</small> 霽	困去 <small>祭</small> 屑	16(27-28)
-	開	-----	-----	隊去 <small>祭</small> 霽	-----	17(29-30)
-	合	-----	-----	隊去 <small>祭</small> 霽	-----	18(31-32)
外15	開	-佳--	-蟹--	泰卦 <small>祭</small>	-開--	13(23)
外16	合	-佳--	-蟹--	泰卦 <small>祭</small>	-開--	14(24)
外17	開	(痕)臻真-	很[訛]軫-	恨[緜]震-	沒櫛質-	19(33-34)
外18	合	魂-諄-	混-準-	恩-稕-	沒-術-	20(35-36)
外19	開	--欣-	--隱-	--厥-	--迄-	21(37)
外20	合	--文-	--吻-	--問-	--物-	22(38-39)
外21	開	-山元仙	-産阮淵	-禰顯線	-錯月薛	25(44-45)
外22	合	-山元仙	-産阮淵	-禰顯線	-錯月薛	26(46-47)
-	開	--元-	--元-	--元-	--月-	27(48)
-	合	--元-	--元-	--元-	--月-	28(49)
外23	開	寒剛仙先	旱澗獨鈺	翰諫總殺	曷點蘆屑	23(40-41)
外24	合	桓剛仙先	緩澗獨鈺	換諫總殺	末點蘆屑	24(42-43)
-	開	---韻	---韻	---韻	---韻	29(50)
外25	開	豪肴宵蕭	皓巧小篠	號效笑曉	鏗母藥-	30(51-52)
外26	開	--查-	--小-	--笑-	-----	-
内27	開	歌-岡-	哿---	箇---	箇---	31(53)
内28	合	戈-戈-	果---	過-過-	箇---	32(54-55)
外29	開	-麻麻-	-馬馬-	-禡禡-	-箇--	33(56-57)
外30	合	-麻--	-馬--	-禡--	-箇--	34(58-59)
内31	開	唐-陽-	蕩-莖-	宕-樣-	鐸-藥-	35(60-61)
内32	合	唐-陽-	蕩-莖-	宕-樣-	鐸-藥-	36(62-63)
外33	開	-庚-清	-梗-靜	-敬-勁	-陌-昔	37(64-65)
外34	合	-庚-清	-梗-靜	-敬-勁	-陌-昔	38(66-67)
外35	開	-耕-清	-耿-靜	-靜-勁	-麥-昔	39(68-69)
外36	合	-耕-清	-(耿)-迫	-(靜)-徑	-麥-昔	40(70)
内37	開	侯-尤幽	厚-有黝	候-宥幼	韻-韻-	42(73-74)
内38	開	--侵-	--寢-	--沁-	--緝-	43(75-76)
外39	開	覃咸鹽添	感琰琰	勘陷鹽緝	合洽葉站	44(77-78)
外40	開	談銜嚴添凡鹽	敢檻儼添范鹽	闕鑑嚴添梵鹽	盍狎業帖乏藥	45(79-80)
外41	開	--凡-	--范-	--梵-	--乏-	-
内42	開	登-蒸-	等-拯-	證-證-	德-職-	41(71-72)
内43	合	登---	等---	證---	德-職-	-

韻があつた場所へ配置。

③外轉二十五蕭を第二十九圖として分出し（一枚増）、外轉二十五の空格に外轉二十六宵を配して外轉二十六は削除（一枚減）。

④外轉三十九添を外轉四十に移し、外轉三十九の空格に外轉四十鹽を配置。

⑤外轉四十一凡を外轉四十嚴に合流、外轉四十一は削除（一枚減）。

⑥内轉四十三を削除（一枚減）。第四十一圖に「域」字がみえるので内轉四十二に合併した可能性がある。

これらの處理により、「韻鏡」にみられた韻目配置の混雜が「聲音韻譜」では解消されて各韻の獨立性が比較的に高まっている。⑥の内轉四十三を削除した理由が他に比して明確でないが、八〇枚という總數に合わせるため、削除して餘り支障を生じない圖として字數の少ない内轉四十三が選ばれたものであろうか。

ところでなぜ一枚の内容を二枚に分けたかについては、「聲音韻譜」序にある記述が一つの參考になると思われる。

自然界の音聲に目を向ければ陰陽をあわせ持たぬものはなく、輕重に分かれぬものはない。陰あれば陽あり、清あれば濁あり、輕があれば重がある。いま了義の字母に即して論じれば、唇音が輕重に分かれ、齒音が清濁に分けられるのがそれである。舌音は舌上と舌頭に區別されるが、舌頭が重音で舌上が輕音である事は知られているだろうか。一方、牙音と喉音は輕重に分けず、半宮半徵も二種のみで各々一種を缺く。これは了義の字母の不十分な點である。ただ「皇極」の用音法のみ唇舌牙齒喉半を全て輕重に分け、聲調は平上去入に分け、韻は開發收閉に分けている。至つて精緻である。<sup>(1)</sup>

「皇極經世解起數訣」「聲音韻譜」について

「了義字母」は「胡僧了義三十六字母」とも記され、いわゆる三十六字母を指す語と思われる。この三十六字母では唇・齒・舌音を輕唇と重唇また舌上と舌頭などに分ける一方、牙・喉・半宮半徵（來・日母）については各一類にとどめ、半舌・半齒も一類を缺く。しかし、祝氏によれば、自然界のあらゆる音にして陰陽輕重の對立を超越するものは無いのだから、「皇極」に示される如く聲類は全て輕重や清濁の二類に分かれて然るべきという。「皇極」とは恐らく先に觸れた邵雍「皇極經世書」「地音圖」を指し、祝泌は「地音圖」が收字を清濁二類に分ける事を一つの根據に先行韻圖の收字を分割したとみられる。この措置は先の「地音圖」「一百五十二音」比較でみた、「一百五十二音」が收字を開發收閉に四分した上で清濁二類に分け、更に半音一行を加えて「地音圖」と數的に等しくなる點とも關係している。形式的な操作との印象も受けるが、李新魁氏によれば半音一行が増えた事には當時の讀音も關係したという。<sup>(2)</sup>

また、「聲音韻譜」の體裁に到るのを容易にする構造の「韻譜」という先行韻圖が存在した事も、「聲音韻譜」の編纂に大きく影響したと思われる。祝泌序によると「韻譜」は「聲音韻譜」製作の中心資料であつた。「韻心」とは文中の「心鑑」と同一資料であろう。

偶々職務に暇ができたので、徳清縣丞方淑「韻心」、當塗刺史楊俊「韻譜」、夷狄である金人の「總明韻」を手にとり比較検討を行い、四十八音を決定し、これを二百六十四姓に冠して康節先生の聲音の學を定めた。「心鑑」について指摘するならば、輕重を一つに併せ、喉音の配置順序も亂れている。良い機會であり「韻譜」に無い文字を補い、牙音と喉音を分出し、半音の行を増設し、合わせて一書として完成させた。<sup>(3)</sup>

ここに「聲音韻譜」編纂に際して方淑「韻心」、楊俊「韻譜」、金人の「總明韻」なる資料を用いた事、また「心鑑」「總明韻」から「韻譜」に無い字を補い、牙音と喉音は各々分出し、更に半音の枠を増やして書を成した事が述べられる。「四十八音」は恐らく清濁二圖の聲母枠數で、この數は「地音圖」に示される聲母の種類と合致する。「二百六十四姥」とは「一百一十二聲」と「一百五十二音」の合計か、或いは韻圖の總枠數を象徴するものだろうか。さて序に牙・喉音を分出したとあるが、基づく「韻譜」が假に『韻鏡』型の横二十三行からなる韻圖であれば、牙・喉音の箇所を各々二類に分割しただけでは「聲音韻譜」に確認される様な全聲類が二類に分かれる體裁にならない。この點に關して嘉泰三(一二〇三)年に張麟之により書かれた『韻鏡』序によれば、「韻譜」は等位(＝聲類)に基づき唇・舌・齒音を各二類に分け、更には分出した聲類のため枠を新設した、つまり全字母が独自の行枠を持つ横長の韻圖であつた。編者として楊俊とあるが、先の祝泌序にみえた楊俊と同一人物であらう。

先日、樞密院事を務めた楊俊が淳熙年間に編んだ「韻譜」を入手した。序によれば、當塗に赴任の後、歷陽で刊行された「切韻心鑑」を得て先行資料を用い校定を加え、役所の印刷局で刊行したものである。中身を調べると所謂「洪韻」であつた。僅かに違ふ點もあり、従來は一紙に二十三種の字母を並べて全體の行を構成し、上方横向きに「二十三種を」並べ、下の空格に残り十三種の字母を配して三十六字母を一覽できたが、楊氏はこれを變更して三十六字母を二紙に分割し、表枠の高さは變えず「十三母を」横に引き出して並べている。發音してみると、亂れて音がそろわない。従來を踏襲してこそ正しく、變更が誤りであると氣づかな

かつたのである。(「」は譯者補)

楊俊により淳熙年間(一一七四・一一八九)に撰述されたという「韻譜」はいま失われ書の體裁は必ずしも明確でないが、丁度それは司馬光の編と傳えられる韻圖資料『切韻指掌圖』に確認される體裁と恐らく大變に近いものであつた。そして「韻譜」が『切韻指掌圖』と同様に横長の韻圖であつたので、「聲音韻譜」の枠組みを作る際に「韻譜」の牙・喉音を分出するだけで全聲類を分割できたという事であらう。また、先の祝泌序に「韻心」「心鑑」とあるのは、張麟之序に「韻譜」編纂に利用されたと記す「切韻心鑑」と同一資料と推測され、張麟之序に「喉音の先後をみだす」と述べる點からすると、この「切韻心鑑」の喉音類の配列は「韻譜」「聲音韻譜」型の「曉匣影喻」でなく、『韻鏡』『七音略』で採用される「影曉匣喻」であつた可能性がある。張麟之序に引く「韻譜」序によれば「切韻心鑑」は「韻譜」編纂に使用されて既に密接な關連を有していたらしいが、そうした二書を祝泌がどう活用しえたか疑問もある。或いは「聲音韻譜」が『廣韻』『集韻』各々の小韻代表字を併記するなど、多種の文字を收めんとする點は、「切韻心鑑」「韻譜」二書の收字を包含した結果でもあつただらうか。もう一種、張麟之序に「洪韻」とあるが、李新魁氏はこれを「韻鏡」系韻圖の俗稱であるという。

## 二・三「總明韻」

「總明韻」という資料は書目にもみえず編者や内容について殆ど不明だが、先掲(七)の韻例に「聲音韻譜」の構造を説いて「總明韻」に言及する箇所がある。後述の便宜上、原文を併記する。

最上部は字母であり、その下は平上去入の四聲を分ける。各聲

調を更に四等に分けるのは、古韻の字と字母とは同じ音位でも「東・中、公・弓の如く介音や聲母の違いにより」字が異なる場合が多いためである。聲調と四等が「縦に」四つに區切られるのは全清・半清・半濁・全濁の違いを分けたものである。「總明韻」では字母ごとに一二三四と數字が付く。「」は譯者補)

(最上層是字姥、其下分平上去入四聲、每聲又別四等者、古韻字與姥、音同位字不同者多故、平仄四等各具四眼者、分全清半清半濁全濁之等也、總明韻於每姥之字有一二三四者也)

この部分は現在も『韻鏡』等に確認される韻圖體裁について解説をしたものと先ずは理解できるが、李新魁「一九八三」にこの一段について踏み込んだ解説がある。

祝泌の文言からすると祝氏が分ける四等とは全清・半清・半濁・全濁の事である。これら「等」は「總明韻」という韻圖では一二三四等と呼ばれる。祝氏の説明から彼は聲母の發音部位で等を分け、等の名稱を全清半清などとしたと分かる。これは沈括の説く輕・中輕・重・中重の四等に相當する。祝書では圖に開發收閉また清濁と表示がある。同じ東韻でも祝氏は一等を「清」と稱し三等を「濁」と稱する。また一等各韻を「清」と稱し三等鐘韻を「濁」と稱する。明らかに祝氏は清濁等を區別しており、これは彼が韻例で述べる内容と合う。彼のいう清濁を別の韻圖では一二三四等韻と稱している。

恐らく李氏は「音同位字不同者多故」でなく「音同位字不同者多」と解し、「故平仄四等各具四眼者」と繋げたので、「每聲又別四等者」云々と「分全清半清半濁全濁之等也」とに因果關係が生じ、それで「四等」と「全清」等を同一視する考えに至ったのであろう。靜嘉本

『皇極經世解起敷訣』「聲音韻譜」について

も「故」の前に句點を打つが、「每聲又別四等者」に對應して「音同位字不同者多」では何か不足の感も拭えず、文意を考慮すると「故」を文末に置いて後に繋げない方が流れは明確になるようにも思われる。さて李新魁「一九八三」では從來説と同じく祝書の「開發收閉」という語が「一二三四等」に相當すると認めており、李氏は「一二三四等」という語の方に從來に代わる別の新たな意味を當てる必要を或いは感じたかもしれない。しかし、李氏が四等に關連するとして指摘する「聲音韻譜」の清濁は必ずしも「全清・半清・半濁・全濁」に接點を有する概念ではなく、むしろ先述「地音圖」の内容に「聲音韻譜」を合わせる方法の一つであった。陳梅香氏は先の李氏説に疑問を呈し、「聲音韻譜」は確かに清濁で表を分かつが、李氏の言及する「全清・半清・半濁・全濁」の別は適用されない點を指摘し、祝泌のいう「等」は清濁の區別を指すものでなく、音韻學で一般に理解される「等」と考えて支障が無いと論ずる。筆者にも李氏の説は問題を徒に難しくするものに思われて支持し難く、付隨して「總明韻」に關する李氏の解釋に若干の疑問が湧く。というのも韻例によると「總明韻」は「字母に數字を付した」書だが、假に「總明韻」が韻圖であるとして、圖中の字母に數字を付すとは如何なる處理か、具體的な内容を想像し難いのである。陳梅香氏も「總明韻」を韻圖と考えていて、先掲「一百五十二音」の如き、「全清・半清・半濁・全濁」の別を「一二三四」の數字で置換した體裁とみている。しかし、「一百五十二音」という部分的項目に數字が用いられる分には問題も無いか知れないが、韻圖全體に「一二三四」の表示を採るとなれば使用に不便こそあれ利點も無く、假に「韻鏡」の如く「清・次清・濁・清濁」と示して何がどれだけ不都合であるのか、敢えて「一二三四」を採る意圖が理解し

難い。抑も思うに「一百五十二音」の「一〇四」は調音部位により「一〇五」「一〇三」と増減する點から考えても、あくまで箇條書き用の數字に過ぎず、聲類を代表するものでは必ずしもない。そして「總明韻」について韻圖でないとするなら、「毎姥之字」つまり字母ごとに數字が付くというので、例えば現在も金・韓道昭『五音集韻』（一二〇八年）に確認されるような、各小韻の冒頭に當該の字母を表示し、その下に等位を數字で示す體裁の韻書であったと推測もできる。

いま『五音集韻』と『聲音韻譜』の間に明確な關連を見出すのは難しいが、『五音集韻』の内容は『廣韻』『集韻』を大きく逸脱するものではないので、既に「韻譜」「心鑑」を用いて『廣韻』『集韻』の内容が『聲音韻譜』に反映されているなら、他資料の更なる痕跡は現れにくい。もつとも關連が皆無というわけでもなく、『五音集韻』に確認される『玉篇』由來の東韻「煩、渠公切」や「鱧、奴東切」といった字は『聲音韻譜』にも收録がみられる。他方で、韓道昭が當時の言語状況や等韻理論に基づき變更・創出した養韻孃母「養、乃彌切」や沒韻幫母「不、博沒切」等の韓書に独自の要素は『聲音韻譜』に無い。この事から、韓書それ自體ではなく、系統的に溯って關連を有する他の韻書資料も検討材料とする必要があるかも知れない。そう思わせる例の一つに『聲音韻譜』屋韻溪母「籀」字がある。『廣韻』『集韻』の當該小韻にこの「籀」字は無く、「籀」ならあるので「籀」は訛字である可能性も考えられる。しかし、金・邢準『新修疊音引證羣籍玉篇』（一一八八年）竹部をみると「籀」字が「省韻」（資料符號「〇」）より採られて「驅菊切、說文曰酒母也」という義訓と共に存在している。私見によれば邢書の「省韻」は『集韻』を指す語であるが、『集韻』の當該反切は「丘六切」であるのに、先の義訓では「驅菊切」と

『廣韻』反切を用いて些か奇妙である。邢書には他に「廣集韻」なる書が引かれ、その資料符號は「〇」であって版刻上は「〇」に良く似るので、あるいは邢書の「籀」は實際には「廣集韻」由來であった可能性もある。この「廣集韻」は韓書と同様に『廣韻』と『集韻』を合體させたような構造で、『集韻』字にも『廣韻』反切を充てていたらしいので、「籀」が『集韻』由來でなく『廣集韻』由來なら『廣韻』反切を有していてもそう不思議はない。假に『廣集韻』と「總明韻」との間に繼承關係が存在するという背景があったとすれば、それを反映して『聲音韻譜』に「籀」が現れた可能性も考えられなくはないと思われる。

### 三 「聲音韻譜」の資料的位置

李新魁「一九九四」に指摘があるが、『聲音韻譜』は收字の選擇において『集韻』の代表字を優先する傾向がある。この點は宋代の韻圖解説書『盧宗邁切韻法』（一一七九年序／以下、盧書と稱す）に魯國堯氏が見出した特徴と類似する。魯氏によると盧書が解説對象とした韻圖は『集韻』の代表字を採用した『集韻』系四十四轉型韻圖といふべきもので、「韻鏡」「七音略」といった『廣韻』系四十三轉型のいわゆる早期韻圖が登場した後に隆盛をみた。ここにいう『集韻』系とは嚴密には『廣韻』『集韻』混合型であり、早期韻圖にも『集韻』の影響は若干あるが、これは傳承過程で『廣韻』以外の要素が入り込んだものとされる。次頁に魯氏作成の表に『聲音韻譜』『韻鏡』『七音略』の情報を加えたものを挙げ、『集韻』と合う部分を四角で圍んだ。表中「羣一」は「羣母一等」を示す語でなく、盧書で「羣」組として挙げられる内の最初の例という意味である。また、原典を確認すると最





切韻指掌圖	四聲等子	聲音韻譜	切韻指掌圖	四聲等子	聲音韻譜
家皓號鐸	家皓號鐸	家皓號鐸	皆駭怪點	皆駭怪點	皆駭怪點
肴巧效覺	肴巧效覺	交巧效覺	齊齊聲質	齊齊聲質	齊齊聲質
宵小笑藥	宵小笑藥	宵小笑藥	灰脂隊質	灰脂隊末	灰脂隊末
模姥暮沃	模姥暮沃	模姥暮屋	脂旨至質	脂旨至質	支紙眞音
魚語御屋	魚語御屋	魚語御屋	微尾末物	微尾末物	微尾末勿
虞模遇燭	虞模遇燭	虞模遇屋	歌智箇點	歌智箇點	歌智箇點
侯厚候德	侯厚候屋	侯厚候屋	戈果過錫	戈果過錫	戈果過錫
尤有宥迄	尤有宥屋	尤有宥屋	麻馬禱辭	麻馬禱圖	麻馬禱圖
幽黝幼質	幽黝幼屋	幽黝幼屋			
哈海代質	哈海代局	哈海代末			

子』とよく合致し、偶然とも考え難いので資料間に接点のあった事が疑われるが、二書の體裁にはむしろ差異が多い。例えば『四聲等子』序に祖本である智公「指玄之論」の形式に觸れて「三十六字母で三百八十四聲をまとめ二十圖に分ける」とあり、『四聲等子』は祖本の段階から『切韻指掌圖』のような一表に計五百七十六棒（十六×三十六）を有する横長系韻圖とは形式を異にしていたと推測される。字母の配列も『四聲等子』は見系に始まり、「聲音韻譜」「韻鏡」の様に幫系でない。また、『切韻指掌圖』『聲音韻譜』で支脂之各韻の精系開口四等字が一等に移動するという、邵雍「聲音唱和圖」の状況を踏襲したとされる處理も『四聲等子』には確認されない。更に「聲音韻譜」では先ず聲調で表を四分してから等位で各聲調を四分するのに對し、『四聲等子』は等位で分けた後に聲調を分ける。要するに顯著な共通項は『集韻』的性格と入聲相配くらいである。各資料の特徴を下段の表にまとめた。<sup>(37)</sup>

盧書や「聲音韻譜」「切韻指掌圖」が掌圖という點で共通する事について、平田氏や魯國堯氏はこれら韻圖と術數家との關わりを指摘し

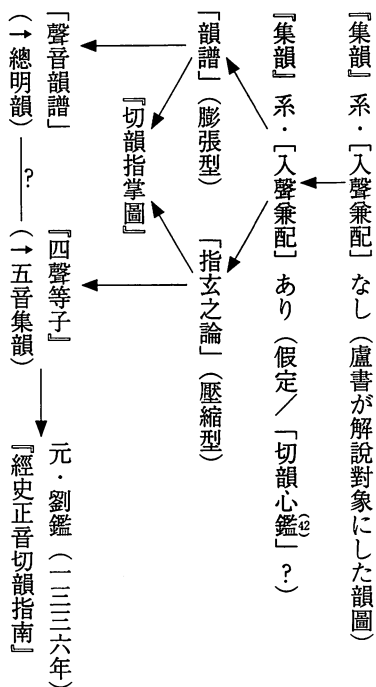
特徴	韻鏡	七音略	盧書	聲音韻譜	四聲等子	切韻指掌圖
一 收録字が集韻系	-	±	+	+	+	+
二 掌圖あり	-	-	+	+	-	+
三 曉匣影喻	-	-	±	+	+	+
四 入聲兼配	-	-	-	+	+	+
五 止攝精四一等へ	-	-	?	+	+	+
六 十三母を分離	-	-	?	+	-	+
七 字母配列牙音優先	-	-	+	+	+	+
八 轉圖二十枚	-	-	?	+	+	+
九 等位優先型	-	-	?	-	+	+

て興味深い。<sup>(38)</sup> 關連して想起されるのが『五音集韻』卷四寒韻「韓」字の義訓で、そこに編者の父である韓孝彦が「指玄論」の注を著した事や、息子達が「韻算術」に通じた事が記される。<sup>(39)</sup>

金に至り、昌黎郡の韓孝彦なる者が現れた。溇陽松水の出身である。彼は「切韻指玄論」に注し、「切韻澄鑑圖」を編み、(中略)三人の息子がおり、長男は道皓、次男は道昭、末は道昉という名で、みな韻算術に通じている。泰和戊辰年間には次子の道昭が『改併五音之篇』『改併五音集韻』を編み、(中略)部首を四百四十四部に併合、五音で分類し全十五卷とした。韻目も百六十韻に併合してまた全十五卷とした。計三十冊である。<sup>(40)</sup>

寧繼福氏によると『五音集韻』が百六十韻を採るのは邵雍「皇極經世解」「天聲圖」の總棒數百六十(空欄含む)を意識したもの、また同一編者による『五音篇海』が四百四十四部を採るのは『周易』「三百八十四爻」と「六十甲子」の計に合わせたものといひ、或いは宋・金の韻學は邵雍の學を各々の學派流に咀嚼して行われる點で土臺を共有し、融合しつつ變化を遂げていった側面があったかと思わせる。さて先掲の特徴分布を概観すれば、盧書が解説對象とした『集韻』系四十

四轉韻圖は早期韻圖（『廣韻』系四十三轉型）と宋元韻圖（『集韻』系二十轉型）の兩者を繋ぐ位置にあるようにも思われ、同様のいわば中間的性格は「聲音韻譜」にも確認し得る。しかし仔細にみると各韻圖には形式の隔たりも大きく、中間的という見方では例えば先に言及した「聲音韻譜」と「四聲等子」とで入聲兼配が共通するのは何故かといった問いに見通しを得るのはなお困難である。そこで盧書が解説対象とした入聲兼配が無い『集韻』系韻圖に加えてもう一種、入聲兼配を有する『集韻』系韻圖を設定し、関連の様相について左圖の様に想定して資料関係の整理を試みたい。



各資料は先行資料と異なる新たな特徴を有する可能性が高いという前提から如上の関係を假定すれば、「聲音韻譜」は入聲兼配の韻圖から分派した流れの一つであり、「四聲等子」も同源に發する資料であったため、二書の特徴に類似する部分が見られると推測される。前者は聲類の別を重視して轉圖を「膨張」させる道を選び、後者は韻類の合理化を目指す「壓縮」の方向を選んだ。また、二書における『廣

『皇極經世解起數訣』「聲音韻譜」について

韻』『集韻』以外の要素に共通する部分がある事については、『五音集韻』とそれを系統的に溯る存在としての韻書「總明韻」が二書の増補過程に影響した事も疑われる。その後、「聲音韻譜」の如き膨張型は主流とならず、「指玄之論」など壓縮型が正統を占め、例えば『經史正音切韻指南』に「古有四聲等子、爲傳流之正宗」と記されるに到った。「切韻指掌圖」に關して付言すれば、この韻圖は膨張型と壓縮型の特徴を兼有し、それでいて「聲音韻譜」「四聲等子」いずれとも明白な繼承關係が看取されないが、或いはこれは「切韻指掌圖」が「韻譜」「指玄之論」などやや早期に出た資料の體裁を折衷し、かつ編者の依據方言や韻圖としての獨自性の獲得といった動機により先行資料からの脱却を目指したためかと思われる。唐作藩氏がその音系の「革新性」を指摘しながら「保守的」な『四聲等子』より早期の成立と推測したのは、そうした『切韻指掌圖』の特異な位置を示唆する見方にも受け取れる。

#### 四「聲音韻譜」の音韻特徴

最後に「聲音韻譜」の音韻特徴について諸本を調査して得られた例を挙げる。音韻特徴に關しては李新魁氏らにも例示があるが省略が多く、また李氏には判断上「集韻」を重視しない所があり、有効と思われない例も少なくない。本節はそれを補完する側面を有する。例中「鍾徹」は「鍾韻徹母」の意で、「聲音韻譜」での位置を表す。「G」は「廣韻」反切、「J」は「集韻」反切を指し、「↓」の下はこれらの反切から歸納される聲母である。「※」は李氏も指摘した例である事を示す。

四一 聲類に關して

◇端系・知系・照系の混淆

鐘徹「衝」G尺容丁昌容↓穿 轄照「晰」G陟錯丁陟轄↓知  
 支床「錘」G直垂丁重垂↓澄<sup>※</sup> 虞床「廚」G直誅丁重株↓澄<sup>※</sup>  
 山照「菴」G墜頑丁除鰥↓澄<sup>※</sup> 仙穿「豨」G丑戀丁寵戀↓澄<sup>※</sup>  
 仙知「旃」G丁諸延↓照 仙穿「旌」G丑延丁抽延↓徹  
 肴穿「鬢」G土刀丁他刀↓透 巧徹「魘」G丁士絞↓床<sup>※</sup>  
 宵照「嘲」G丁涉交↓知<sup>※</sup>

◇床母と禪母との混淆

質禪「實」G神質丁食質↓床 職禪「食」G乘力丁實職↓床<sup>※</sup>  
 御床「署」G丁常恕↓禪<sup>※</sup> 櫛禪「齟」G崩瑟丁食櫛↓床  
 眞禪「神」G食鄰丁乘人↓床 術禪「術」G食聿丁食律↓床  
 薛禪「舌」G丁食列↓床 陌禪「醋」J實窄↓床  
 洽禪「筵」G士洽↓床 至禪「示」G丁神至↓床<sup>※</sup>  
 禡禪「玠」G古罵丁舌罵↓床<sup>65</sup> 禡禪「射」G丁神夜↓床<sup>※</sup>

◇影母と喻母との混淆

腫影「勇」G餘隴丁尹竦↓喻<sup>四</sup> 旨影「唯」G以水丁愈水↓喻<sup>四</sup>  
 止影「矣」G于紀丁羽己↓喻<sup>三</sup> 止喻「諶」G於擬丁隱己↓影  
 泰喻「藹」G丁於蓋↓影<sup>※</sup> 止影「以」G羊己丁養里↓喻<sup>四</sup>  
 準影「尹」G餘準丁庚準↓喻<sup>四</sup> 獮影「演」G丁以淺↓喻<sup>四</sup>  
 獮影「充」G丁以轉↓喻<sup>四</sup><sup>※</sup> 線影「衍」G予線丁延面↓喻<sup>四</sup><sup>※</sup>  
 馬影「野」G羊者丁以者↓喻<sup>四</sup> 屋影「育」G丁餘六↓喻<sup>四</sup>  
 葉影「曄」G筠輒丁域輒↓喻<sup>三</sup> 有影「有」G丁云久↓喻<sup>三</sup><sup>※</sup>

◇清濁に關する混淆

東徹「冲」G直弓丁持中↓澄 炊澄「斲」J侘斬↓徹

◇照系二等および三等の混淆

旨照「柿」J側几↓照<sup>三</sup> 東床「崇」G鋤弓丁鉏弓↓床<sup>二</sup>  
 獮審「翼」J式撰↓審<sup>三</sup> 紙穿「揣」G初委丁楚委↓穿<sup>二</sup><sup>※</sup>  
 質穿「刺」G初栗↓穿<sup>二</sup><sup>※</sup> 尤喻「由」G以周丁夷周↓喻<sup>四</sup><sup>※</sup>  
 錫喻「椹」J于昊↓喻<sup>三</sup> 有喻「袖」J羊受↓喻<sup>四</sup>

◇泥母と孃母との混淆ほか

腫孃「孃」J乃渾↓泥 職泥「匿」G女子丁呢力↓孃<sup>※</sup>  
 線泥「碾」G丁女箭↓孃<sup>※</sup> 轄泥「髻」G丁而轄↓日  
 この他、支脂之（上去聲を含む）三韻の四等精系が全て一等級へ移動する點が特徴としてあり、先述の様にこの特徴には邵雍『皇極經世書』との關連が指摘される。ここに擧げた例にも邵書に既に現れている特徴が多いが、割合に集團的な變更である點からしても、或いは邵書の内容を承けてなされた部分もあつたであろうか。

四、二韻類に關して

東邪「松」	G 丁祥容 ↓ 鍾*	冬竝「蓬」	J 蒲恭 ↓ 鍾
沃心「夙」	G 息遂 ↓ 息六 ↓ 屋	支孃「尼」	G 丁女夷 ↓ 脂*
支微「麋」	G 武悲 ↓ 旻悲 ↓ 脂	脂曉「唏」	J 香依 ↓ 微
卦審「浙」	G 丁山芮 ↓ 祭	怪溪「慨」	G 苦愛 ↓ 口漑 ↓ 代
怪疑「礙」	G 五漑 ↓ 牛代 ↓ 代	霽幫「警」	J 必袂 ↓ 祭
霽滂「警」	J 匹曳 ↓ 祭*	夬照「療」	J 側例 ↓ 祭
夬審「際」	G 丁所例 ↓ 祭	夬穿「籟」	J 初芮 ↓ 祭
夬審「啤」	G 丁山芮 ↓ 祭	術疑「崛」	G 魚勿 ↓ 魚屈 ↓ 物 / 迄
稗來「論」	G 丁盧困 ↓ 恩	屑清「隴」	G 七絶 ↓ 促絶 ↓ 薛*
薛明「蔑」	G 丁莫結 ↓ 屑	薛竝「斃」	G 丁蒲結 ↓ 屑
肴明「毛」	G 莫袍 ↓ 謨袍 ↓ 豪*	轄幫「八」	G 博拔 ↓ 布拔 ↓ 黠
映心「性」	G 丁息正 ↓ 勁	賺審「縻」	J 所感 ↓ 感
陷來「額」	G 丁郎紺 ↓ 勤	合透「榻」	G 吐盍 ↓ 託盍 ↓ 盍
洽照「唐」	J 莊輒 ↓ 葉	洽審「歐」	J 色輒 ↓ 葉
檻床「曉」	J 士冉 ↓ 琰	嚴穿「綵」	J 充甘 ↓ 談
嚴禪「筍」	J 市甘 ↓ 談	儼審「澗」	J 賞敢 ↓ 敢
業照「譚」	J 章盍 ↓ 盍	肴知「刀」	G 都牟 ↓ 都勞 ↓ 豪*
肴徹「鑿」	G 土刀 ↓ 他刀 ↓ 豪*	質 <sup>四</sup>	↓ 四等
質 <sup>四</sup>	↓ 三等	屋 <sup>一</sup>	↓ 三等*

他に李氏も指摘した尤韻と幽韻、庚韻と清韻、嚴韻と凡韻の集團的混淆が確認される。また、しばしば李氏は前出「一百十二聲」表の状況に依據しつつ、より廣範な韻の合流を指摘するが、該表は邵書の數き寫しに近いと考えられるのでいま言及しない。

ところで、先に引用した戴震の記述には以下の續きがある。

『皇極經世解起數訣』「聲音韻譜」について

そこで私が韻の等呼を調べてみると、一東の一等字は二冬と區別がなく、六脂の三等字は八微と區別がなく、十七眞の二等字は十九臻と區別がなく、十七眞・十八諄の三等合口呼と二十文とは區別がなく、眞韻の三等開口呼は二十一殷と區別がなく、二十七刪は二十八山と區別がなく、二仙の四等字は一先と區別がなく、四宵の四等字は三蕭と區別がなく、十二庚の二等字は十三耕と區別がなく、十二庚は十四清の三等開口呼と區別がなく、清韻の四等字は十五青と區別がなく、十八尤の四等字は二十幽と區別がなく、二十二覃は二十三談と區別がなく、二十四鹽の四等字は二十五添と區別がなく、鹽韻の三等字は二十八嚴・二十九凡と區別がなく、二十六咸は二十七銜と區別がなく、他も開合・等位の同じものは必ず區別がない。恐らく韻類を定める際に意圖的に緻密さを求めるあまり強引に輕重の別を生じたものであろう。

これだけの合流が楊氏「韻譜」の状況を述べたものであるのか、或いは宋元韻圖など他資料のそれであるのか、判断が難しい所もあるが、通用の半分以上は「聲音韻譜」に類似の現象が確認され、李氏が行った様に「集韻」でなく「廣韻」を優先して考察すると該當項目はより増える。戴震は「韻譜」に校訂を加えた人物で書の詳細に通じていたのであり、文章の脈絡から推測してもやはり「韻譜」に相當の韻の通用現象があった事が、この後段に至る要因の一つであったと思われる。そして「聲音韻譜」に類似の状況が存在する點、趙蔭棠氏が述べた様に「韻譜」の状況を「聲音韻譜」がよく残しているという事を意味するのではないかと推測される。

注

- (1) 『中國古籍善本書目』子部(上)、三三五頁、資料番號三六六六。
- (2) 諸本の異同については、抄本八種を校合した『皇極經世解起數訣』「聲音韻譜」校異記(臨川書店二〇一一年)に記している。
- (3) 陳梅香「一九九三」『皇極經世解起數訣』之音學研究(國立中山大學中國文學研究所碩士論文)、九頁。「藤花吟館」を別號としたらしき清人に梁章鉅(一七七五・一八四九)や楊揆(一七六〇・一八〇四)等がいるが、靜嘉本の「藤花吟館」が誰であるか不明である。上海圖書館所藏とされる『穆天子傳』について『中國古籍善本書目』子部(下)七二九頁に記す「清・章氏藤花吟館抄本」(資料番號八五七九)は重要と思われるが目下のところ確認の機會を得ない。
- (4) 陳梅香「一九九三」、十頁、「抄多校少、校訂的工夫又半途而止」。
- (5) 陳梅香「一九九三」、十一頁。平田氏の見解は「皇極經世聲音唱和圖」與「切韻指掌圖」―試論語言神祕思想對宋代等韻學的影響(『東方學報』五六、一九八四年)、注八四。
- (6) 陳梅香「一九九三」、十頁、「本來的精審許多」。
- (7) 平田昌司「一九八四」第四章に『起數訣』の資料的性格や卜占の方法に關する周密な記述がある。また「二百十二聲目錄併八卦」「二百五十二音八卦」收字に關して李新魁「一九九四」『起數訣』研究(『音韻學研究』第三編)に詳細な検討がある。
- (8) 陸志章氏や李榮氏は邵雍「皇極經世書」「地音圖」の「開發收閉」について、等韻學にいう「一二三四等」と考えて良い部分があると述べる。陸志章「一九四六」『記邵雍皇極經世的天聲地音』(いま『漢語音韻學論集』第一集(崇文書店一九七一年)所收による)七七頁。李榮「一九五二」『切韻音系』「付録三 皇極經世十聲十二音解」(中國科學院語言學專刊第四種)、一七四頁。
- (9) 李新魁「一九八三」『漢語等韻學』(中華書局)、一七五―一七七頁。
- (10) 孔仲溫「韻鏡研究」(臺灣學生書局一九八七年)、九七―九九頁。
- (11) 原文「然際之自然之聲音、陰陽無不該之物、輕重無分之理、有陰則有陽、有清則有濁、有輕則有重也、今卽了義字姆論之、唇音分輕重、齒音分清濁是矣、舌音分舌上舌頭、會知舌頭即重音、舌上即輕音乎、牙音喉音乃不分輕重、半宮半徵又止有二字而缺其一、是了義字姆猶未全、惟皇極用音之法、於唇舌牙齒喉半、皆分輕與重、聲分平上去入、音分開發收閉、至精至微」。
- (12) 李新魁「一九九四」、八頁。
- (13) 原文「偶因官守之暇、取德清縣丞方淑韻心、當塗刺史楊俊韻譜、金甌總明韻相參合、較定四十八音、冠以二百六十四姥、以定康節先生聲音之學、若辨心鑑、合輕重於一致、紊喉音之先後、誠得其當、添入韻譜之所無、分出牙喉之音、添增半音之字、合而成書」。
- (14) 川原秀城「一九九七」數と象徴―皇極經世學小史(『中國―社會と文化』第十二號)、三六六頁。
- (15) 「楊俊」の「俊」は「俠」の誤字である可能性が高い。『宋史』(中華書局本)卷三十四に、淳熙元年(一一七四)八月に徽猷閣學士の楊俊が簽書樞密院事となり、同年十一月に楊俊が職を退いた際には代わって葉衡が知樞密院事(樞密使)を擔った旨の記事がある。
- (16) 原文「近得故樞密楊俊淳熙閣所撰韻譜、其自序云、竭來當塗、得歷陽所刊切韻心鑑、因以舊書手加校定、刊之郡齋、徐而諦之、卽所謂洪韻。特小有不同、舊體以一紙列二十三字母爲行、以緯行於上、其下開附十三字母、盡於三十六字母一目無遺、楊變三十六分二紙、肩行而繩引至橫、調則淆亂不協、不知因之則是、變之非也」。

(17) 李新魁「一九八三」、六三頁。ただ、俗稱ならば「韻鏡」序に「韻譜」即所謂洪韻」とある部分、入聲兼配など「韻譜」は「韻鏡」と違いも大きいのに何故「即ち」と言えるのか、或いは細かな差異を捨象して二書が切韻系である事をいう程度度文言なのか、疑問も多い。「宋史」藝文志に「洪韻海源二卷」が著録され、また「朱子語類」卷一四〇に「洪州有一部洪韻」とある。關連は不明だが「韻鏡」と別に「洪韻」という資料が存在した可能性も考えられる。

(18) 李新魁「一九八三」、五八頁。

(19) 原文「按他的說法、他所分的四等、就是全清、半清、半濁、全濁。這些『等』、在《總明韻》這部韻圖中、則稱爲一二三四等。由他的說明可知、他是以聲母的發音部位分等的、而等的名稱就叫做全清、半清等、這相當于沈括所說的輕、中輕、重、中重四等。祝書中每一圖都標明開、發、收、閉和清濁。同是一個東韻、他把一等的東韻稱爲清、把三等的東韻稱爲濁；一等的冬韻稱爲清、把三等的鍾韻稱爲濁。很顯然、他是以清、濁來區別等第、與他在韻例、中所說相一致。而他的清、濁、別的韻圖則稱爲一二三四等韻。」

(20) 李新魁「一九八三」、一七四頁。

(21) 陳梅香「一九九三」、六四～六五頁。また陳梅香「一九九七」『皇極經世解起數訣』「清濁」現象探析（『聲韻論叢』六、學生書局一九九七年）。

(22) 陳梅香「一九九三」、六五頁。

(23) 『五音集韻』の増字には編者が韻目を一六〇種に併合する前の増字と併合した後の増字があり、併合前の増字には主に『玉篇』が使われる。『五音集韻』の構造や祖本の問題については、拙著『金代字書の研究』（東北大學出版會二〇〇七年）第二章に記した。

【皇極經世解起數訣】「聲音韻譜」について

(24) 「省韻」や後述「廣集韻」の資料的性格について、拙著「二〇〇七」第六章・第七章に検討がある。

(25) 同様の例は屋韻影母「械」ほか數例がある。「械」は「集韻」に従えば「械」に作るべきだが『新修韻音引證羣籍玉篇』月部に「韻」に基づいて「械」を収め、『五音集韻』も當該字を「械」に作る。邢書の「韻」は私見では「廣集韻」を指すと考えられ、「械」も「廣集韻」と「聲音韻譜」を關連づける例の一つとみなす事ができる。

(26) 魯國堯「一九九二」『盧宗邁切韻法述評』（『中國語文』第六期）及び「一九九三」同上（續）（『中國語文』第一期）。

(27) 魯國堯「一九九二」、三四頁。こうした「廣韻」「集韻」との混淆は韻書にもあり、二書の内容を併せ持つ先述の「廣集韻」が金代に通行した事はその一つの表れと思われる。

(28) 魯國堯「一九九二」、四〇八頁。

(29) 李新魁「一九八三」、一七七頁。また馬重奇「一九九六」『起數訣』與《韻鏡》《七音略》比較研究—《皇極經世解起數訣》研究之二（『語言研究』一九九六年增刊號）。

(30) 原文「上年於永樂大典內得宋淳熙初楊俊韻譜、校正一過、其書亦即呼等之說、於舊有人者不改、舊無人者悉以入隸之、與江先生四聲切韻表合、僕巳年定聲韻考、別十九鐸不與覺藥通者、又分覺藥陌麥昔錫之通鐸者爲歌戈之入、謂江先生以曷爲歌之入、未爲戈之入者應改正、楊氏雖不能辨別藥鐸之異而以藥鐸配陽唐、配蕭宵肴豪、又以鐸配歌。戴震「答段若膺論韻」、いま廣文書局『音韻學叢書』十二、『聲類表』所收分に據る。

(31) 『四聲等子』「切韻指掌圖」は『等韻五種』（藝文印書館一九八九年）による。

(32) 趙蔭棠『等韻源流』(文史哲出版社一九七四年本に據る)、五頁に「楊俛韻譜、是宋代等韻圖中一部極重要的書。假設此書尚存、必能解決宋代韻史上好多糾紛。惜永樂大典本被戴東原氏閱過之後、已杳如黃鶴。現觀祝氏之韻圖與戴氏聲類表的氣派有相似處、那麼祝氏的韻圖是否有因襲楊氏韻譜之處呢? 尙待研究」とある。

(33) 原文「以三十六字母約三百八十四聲、別爲二十圖」。嚴密には『韻鏡』型なら十六×二十三で總枠「三百六十八」になる。「三百八十四」とは誤記なのか韻目欄を加えた数なのか未詳。

(34) 金の韓道昭『五音篇海』(一一二〇八年) は見母の部首より始めて「金」部を書の冒頭とする。『五音集韻』も「金」字は侵韻の冒頭にある。「四聲等子」「指玄之論」は金代の書と推測されるが、金代韻學で牙音に始まる方式を採用する事に「金」字が何らかの影響力を有したのであろうか。『四聲等子』について寧繼福「一九九四」「《五音集韻》與等韻學」(中華書局『音韻學研究』第三輯)、「指玄之論」について聶鴻音・孫伯君「黑水城出土音韻學文獻研究」(文物出版社二〇〇六年)第四章「解釋歌義」に成立に關する見解がある。

(35) 平田昌司「一九八四」、第四章、二〇四頁。

(36) 同様の等位優先型韻圖の枠組がカラホト黒城遺跡から發見されている。但しこちらは唇音から字母が始まる。聶鴻音・孫伯君「二〇〇六」、第三章「韻格簿」。

(37) 『韻鏡』にも『集韻』的要素はあるが「七音略」に比べて要素の存在感が小さいため下段の表において「一」とした。

(38) 平田昌司「一九八四」、また魯國堯「一九九三」。

(39) 『郡齋讀書志』(いま廣文書局、王先謙校本に據る)卷四に「切韻指玄論三卷 四聲等第圖一卷」とある。王先謙に據れば「四聲等第圖」は僧

宗彥という人物の編んだ韻圖であるという。書名から「切韻指玄論」と「指玄之論」、また「四聲等第圖」と「四聲等子」との關連が疑われる。

(40) 原文「復至大金、時有昌黎郡韓孝彥者、乃濬陽松水人也、注「切韻指玄論」、撰「切韻澄鑑圖」、…有三子、長曰道皓、次曰道昭、幼曰道昉、俱通韻筭術也、又至泰和戊辰年間、昌黎氏次子韓道昭再行改併五音之篇、改併五音集韻、…併篇部爲四百四十有四、分布五音、立成一十五卷也、又併韻爲一百六十數也、亦分一十五卷也、故將篇韻全部、乃計三十冊數也」。

(41) 寧繼福「一九九二」「校訂五音集韻」(中華書局)前言、十一頁。

(42) 「切韻心鑑」の性格の違いについて李新魁「一九八三」の六三頁にある系統圖(後掲)も示唆的であるが、趙蔭棠「一九七四」の七二頁に指摘されるように「七音略」で鐸・藥韻が豪・肴韻に配される入聲兼配の痕跡が残る點、或いは宋代において入聲兼配は特筆の必要もない程に一定の承認を得ていただろうか。ちなみに陳梅香「一九九三」の一五三頁では「七音略」の兼配殘存について「(元々あった兼配の)刪除が不十分であったか(兼配という)改易を大膽に進められなかった」事によると可能性を述べている。

「五音韻鑑」

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

└─┬─┘

(43) 唐作藩「一九八九」「四聲等子」研究」(呂叔湘等編『語言文字學術論文集—慶祝王力先生學術活動五十周年』知識出版社)、三二二頁。

(44) 紙幅の關係で李氏の擧げた何がどう不適當なのかを逐一具體的に指摘できないが、先掲『皇極經世解起數訣「聲音韻譜」校異記』に李氏との判斷の違いは示されている。

(45) 李氏所見の『集韻』では「舌罵切」であつたらしく、李新魁「一九九



三]三七頁で床禪混淆の例に挙げられるが、筆者の見た北京圖書館所藏宋版(中華書局)では「廣韻」と同じである。祝泌が「舌罵切」に作る本を参照した可能性を考慮して例として残す。

(46) 『五音集韻』之業合併韻の「鑑」小韻は音が「于劫切」であり「聲音韻譜」と合う。

(47) 邵雍『皇極經世書』の音系問題に関する研究として、前掲の陸志韋「一九四六」、李榮「一九五二」の他、周祖謨「一九四二」「宋代汴洛語音考」(いま知仁出版社一九七六『問學集』による)、平山久雄「一九九三」邵雍『皇極經世聲音唱和圖』の音韻體系(『東洋文化研究所紀要』第二〇冊)等がある。

(48) 原文「僕因究韻之呼等、一東内一等字與二冬無別、六脂内三等字與八微無別、十七真二等字與十九臻無別、十七真十八諄内三等合口呼與二十文三韻皆無別、真韻内三等開口呼與二十一殷無別、二十七刪與二十八山無別、二仙内四等字與一先無別、四宵内四等字與三蕭無別、十二庚内二等字與十三耕無別、十二庚十四清内三等開口呼兩韻無別、清韻内四等字與十五青無別、十八尤内四等字與二十幽無別、二十二覃與二十三談無別、二十四鹽内四等字與二十五添無別、鹽韻内三等字與二十八嚴二十九凡三韻皆無別、二十六咸與二十七銜無別、其餘呼等同者音必無別、蓋定韻時、有意求其密、用意太過、強生輕重」。

(付記) 本稿は二〇一〇年七月十一日に關西大學で開かれた日本中國語學會關西支部例會に於ける口頭發表に基づくものである。貴重な藏書の閲覽を許された各機關の御厚意、また發表および執筆に際して數々の貴重な御示教を下された先生方に心より御禮を申し上げます。